

方剂名	効能	生薬組成
書籍	主治および証	病機 方意
<b>解表剤 辛涼解表剤 1</b>		
ぎんぎょうさん 銀翹散	辛涼解表・清熱解毒	連翹・金銀花各 30g・桔梗・薄荷各 18g・竹葉 12g・生甘草 15g・ 荊芥穗 12g・淡豆豉 15g・牛蒡子 18g 粉末にして1回 18gを鮮芦根と水煎服用する。重症は1日4回、軽症は1日3回、効果がなければさらに服用する。あるいは1/2～1/3量を芦根適量と水煎服用する。成薬を服用してもよい。
温病条弁	<p>&lt;主治&gt; 風熱犯衛 発熱、微悪風寒、無汗あるいは汗がすっきり出ない、頭痛、口渴、咳嗽、咽痛、咽の発赤、舌尖辺が紅、舌苔が薄白あるいは薄黄、脈が浮数などを呈す。</p> <p>&lt;病機&gt; 風熱の邪が肺衛および肺経を侵襲した風温初期の症候である。 風熱の邪は口鼻から侵入して肺衛と肺経を障害する。邪正が相争して発熱し、邪が肺衛を鬱阻するので悪風寒や無汗を呈するが、風熱の邪は昇発、疏泄の性質をもつために、腠理を開泄して汗が出ることもあり、悪風寒も軽度である。ただし、邪が衛を阻滞しているで、汗が出てもすっきりとは出切らない。風熱は上部を擾乱し、頭部の気血を逆乱させるので脹り裂けるような頭痛が生じ、肺経に属する鼻や咽部の気血を壅滞するために鼻閉、咽痛、咽部の発赤がみられ、肺気はまだ障害が及ぶと咳嗽を伴う。熱邪は津液を灼消しやすいため、口渇を呈するが、まだ初期で甚だしくはない。熱邪が衛分にあり裏熱が盛んにはなっていないから、舌は舌尖辺が紅を呈するのみで、舌苔も正常の薄白、あるいは薄黄である。衛分で正気が邪に抵抗しているため脈は浮であり、熱邪が気血を鼓動するために数脈になる。</p> <p>&lt;方意&gt; 辛涼清解により肺衛の熱邪を清透外解する。 主薬は辛涼の金銀花・連翹で軽宣透表、清熱解毒、芳香開竅の効能をもち、辛散の荊芥穗・淡豆豉・薄荷が透熱達邪を強める。辛温の荊芥・淡豆豉は、温であるが燥性はなく、大量の清涼薬に配合することによって温性が消失し、辛散透邪を強めることができる。辛平の牛蒡子は祛風清熱、利咽に、桔梗は宣肺利咽に、生甘草は清熱解毒、利咽に働き、肺経の風熱を除き咽痛を軽減する。甘涼軽清の竹葉は上焦の清熱に、芦根は清熱生津に作用し、他薬を補佐する。全体で辛涼透解し衛分の風熱の邪を除く。</p> <p>&lt;参考&gt; 風熱にも微悪風寒は必発であり、短期間で熱感に移行する。このほか、咽痛、咽の発赤などを伴い、風寒束表のような身体痛が見られないのが特徴である。</p> <p>加減法 湿邪を兼ねるときは、化湿宣鬱の藿香・藜蘆を加えて痰湿蒙蔽による心包証を防止する。 傷津には、生津止渴の天花粉を加える。 熱毒がつよいときには、清熱解毒、刺咽の馬勃・玄参を加える。 血熱には、辛温の荊芥・豆豉を除き、涼血止血の茅根・側柏炭・梔子炭を加える。 咳には、止咳の杏仁を加え、熱が肺に入り傷津したときは、清熱生津の生地黄・麦門冬を加え、熱盛傷津には、清熱の知母・黄芩・山梔子と、生津の麦門冬・生地黄を加えて清熱生津する。</p>	
てんしんかんぼうへん 天津感冒片	辛涼解表・清熱解毒	銀翹散 - 芦根 + 羚羊角
天津中薬製薬廠	<p>本方（天津感冒片）は、適応症は銀翹散に準ずるが、清熱解毒、熄風の羚羊角を配合することにより解熱の効果を強め、熱性ケイレン抑制作用も得られる。</p> <p>中国では、羚羊角・犀角・大青葉・板藍根などを配合し、熄風、清熱解毒の効能を強めた様々な成薬が各地で作られている。これらは発熱性疾患で表熱を呈するものに、より効果があるとされている。</p>	